

世界遺産に登録された茅葺き民家

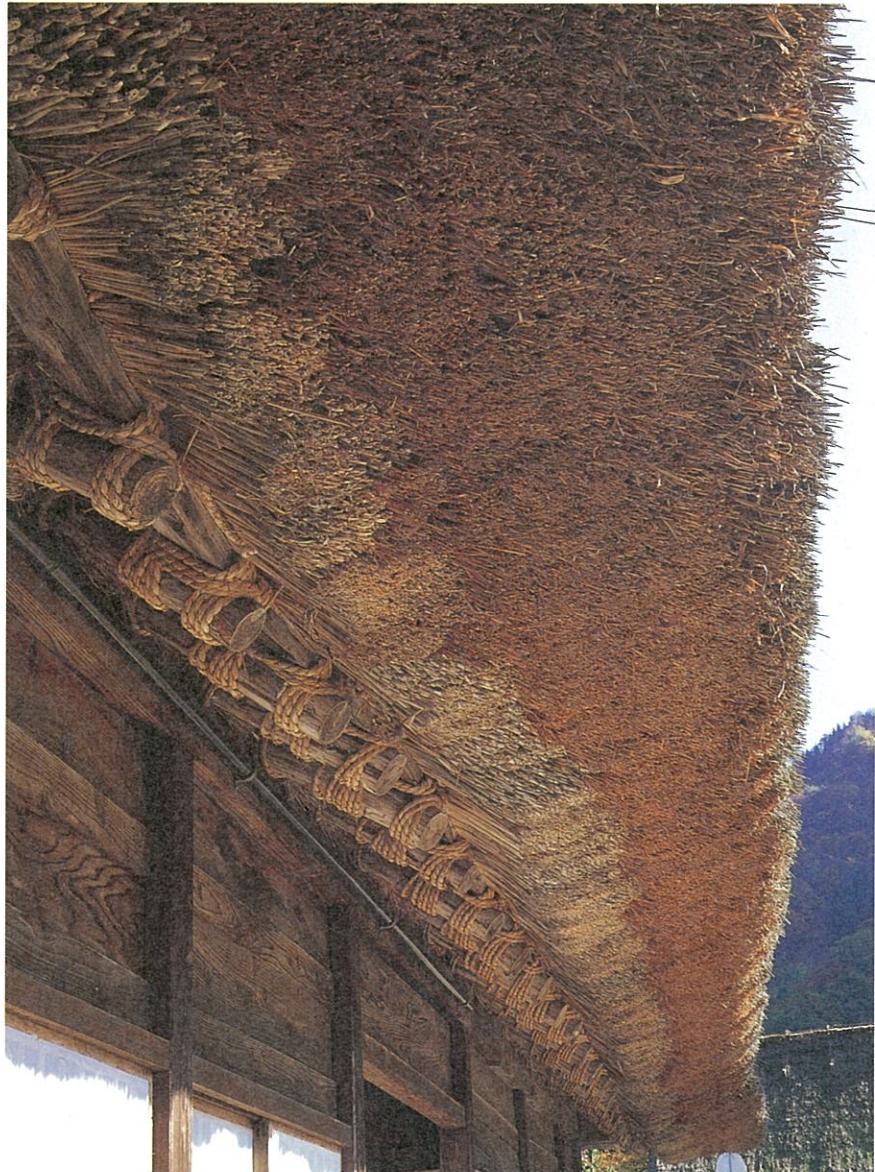
【合掌造り】

合掌造りは「世界遺産」に登録された建築物で、山間に住む人々が生み出し育んできたものである。しかも、合掌造りとともにその生活文化が守られ受け継がれていることは世界的に見ても極めて意義深いものがある。気候風土や生活習慣、身近で入手できる建築部材などから生まれたもので、急勾配の茅葺き切妻屋根は独特である。合掌造りには平入りのものも見られるが、積雪を考慮して妻入りが一般的である。

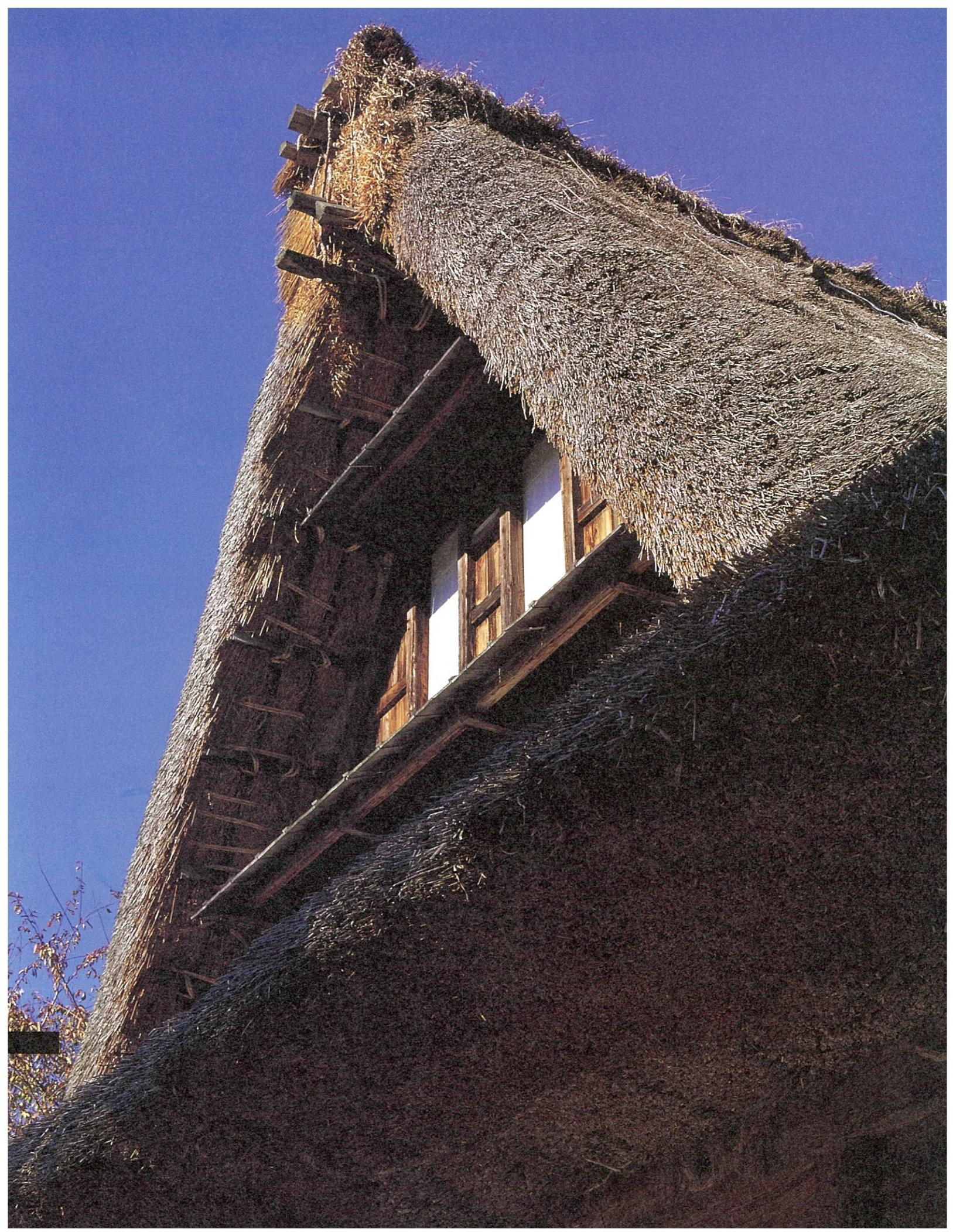
合掌造りの間取りは、小規模では広間型3間取りで、大規模になると整形6間取りになる。入口側に台所、作業土間を設け、床上は裏側を日常生活の才工、表側をデイ、奥は裏側を寝室のネドコ、表側をブツマとしている。2階以上は養蚕のためのアマとしている。

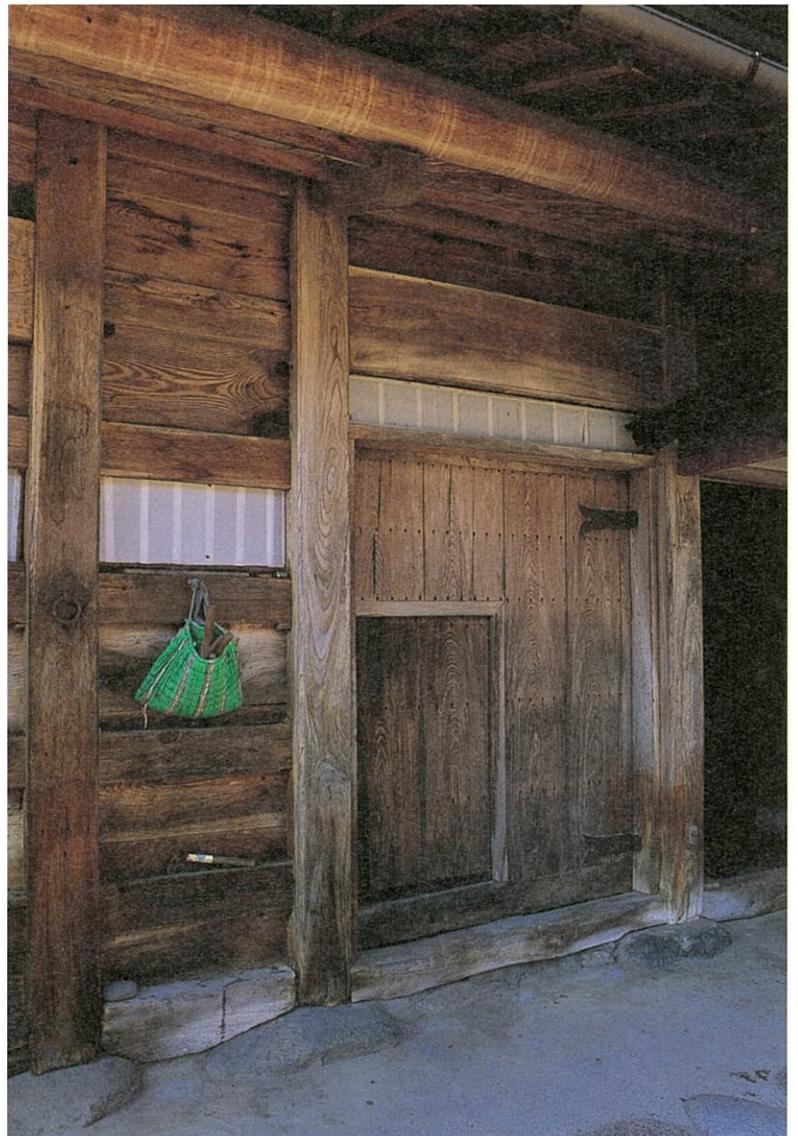
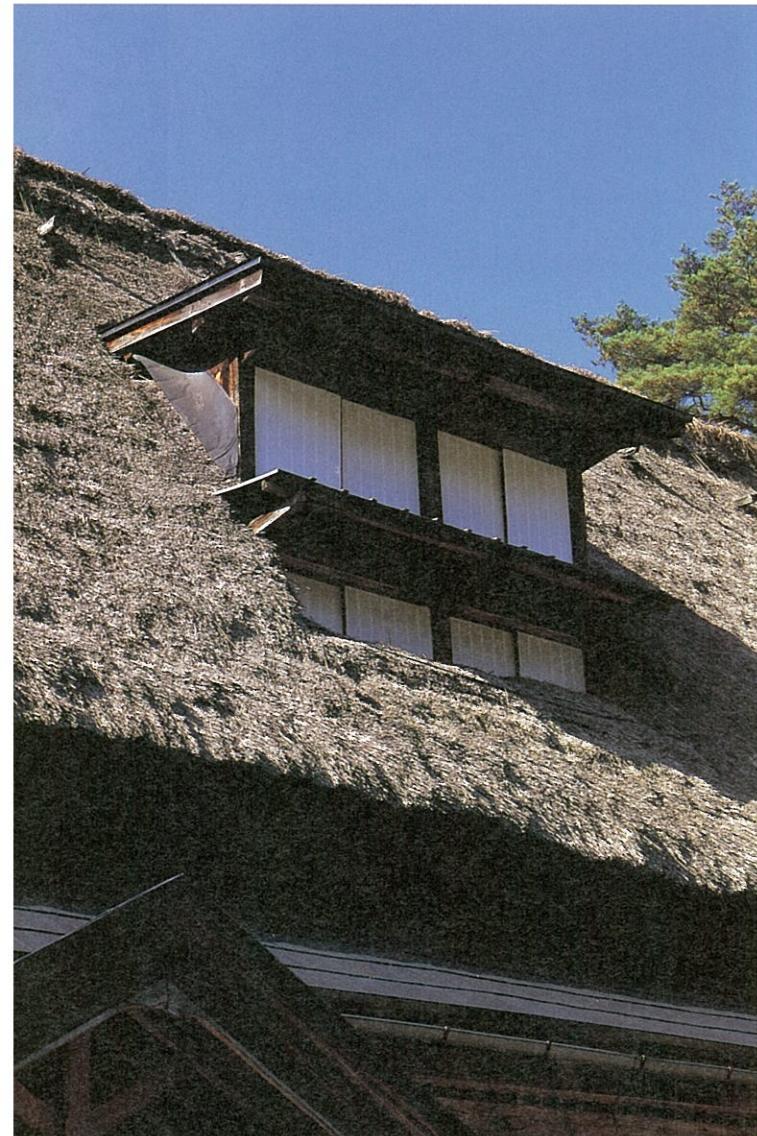
室内は一般的な土壁ではなく、寒冷地のためはめ込みの板壁である。才工まわりは板戸や帯戸を用い、ネドコまわりは板壁になっている。天井はブツマのみ棹縁天井で、以外は天井はなく梁組みをそのまま見せている。また、梁には根曲がり材をうまく利用して生活空間を大きくするなどの工夫が見られる。

外観は、正三角形をなす60度の急勾配の茅葺き屋根が特徴で、オガラ軒、笄棟、雀おどしなどが意匠的である。窓は採光のため上部が障子戸で採光戸（ささら戸）が付く。



急勾配の茅葺き切妻屋根は、豪雪地帯の屋根雪の滑りをよくするためのものである。妻壁は内側が板張りで、採光・通風のための障子窓と霧除庇が付けられている。茅は細い「コガヤ」で、軒先には麻ガラを敷き込んでいる。





平入りの岩瀬家は、五箇山で最大規模の合掌造りである。藩の塩硝上煮役を務めた旧家で、夏は塩硝、冬は和紙・養蚕が行われ、35人もの大家族が暮らした民家である。国指定重要文化財。

